

Psychodramaturgie

－ その目標とアプローチ －

ノルトライン・ヴェストファーレン州立言語研究所ヤボニクム
沢田 麻理

I. Psychodramaturgie とは

Psychodramaturgie (以下 PDL と略す)とは、サイコドラマ (Psychodrama) を外国語教育に応用したものである。

サイコドラマはウィーン及びアメリカ合衆国、主としてニューヨークとニューヨーク州ピーコンにおいてモレノ (Jacob Levy Moreno, 1889-1974) によって開発された集団精神療法であり、生活状況や葛藤を、語るだけでなく、演ずることによって探索するものである (Marineau 1989, 邦訳: 増野 1995)。

これを基に1977年以降ドイツにおいてデュフェー (Bernard Dufeu) によって言語教授法として生み出されていったのがPDLである。以下 II. から V. にかけて Dufeu 1993 に基づいて、その概略を説明する。

II. PDLに採り入れられているサイコドラマの要素

i) 自発性 (Spontaneität, Spontaneity)

参加者 (学習者) は創造的かつ自発的に言語習得の過程に対応していく。決められたプログラをただ消化していく存在ではない。

ii) 出会い (Begegnung, Encounter)

言語を用いた様々な活動を通して参加者同士の関係が育てられる。言語によって表現される事柄は現実には現れている場合もあれば、想像力による場合もある。

iii) アクション (Handlung, Action)

言語を用いて実際にコミュニケーションを行いながら、言語を習得する。

iv) 包括的な人間観

参加者は肉体、感情、知性を持つ存在であり、その精神性も含めて、グループの一員と見なされ、その総体に対して働きかけが行われる。

v) 人格成長の一環をなす学習プロセス

学習は生きる過程の一環をなし、人生は終わることのない学習プロセスである。外国語を習得することは参加者の人格形成に寄与することになる。

vi) 参加者が主役

個人を主役として立てる活動とグループ活動を交互に行いつつ、グループ及びグループを形成する参加者一人一人を主体として学習プロセスが進行していく。

vii) 個体発生的進行過程 (Ontogenetische Progression, Ontogenetic progression)

初期における「ダブル」(Doppeln, Double) から「ミラー」(Spiegeln, Mirror)への場面の発展や役割交換 (Rollenwechsel, Role reversal) は、母語獲得過程と重ねて見ることができる。「ダブル」では活性者 (Animateur/Animatrice; PDLにおける教師の呼び方)の援助を受けながら自己表出を行う言語活動であるのが、「ミラー」では活性者の聞き手となり、対話相手ともなつてゆき、自己中心的な言語使用から社会的な言語使用への移行、拡大が認められる(沢田 1994 参照)。

viii) ウォームアップ (Aufwarmübung, Warm-up)

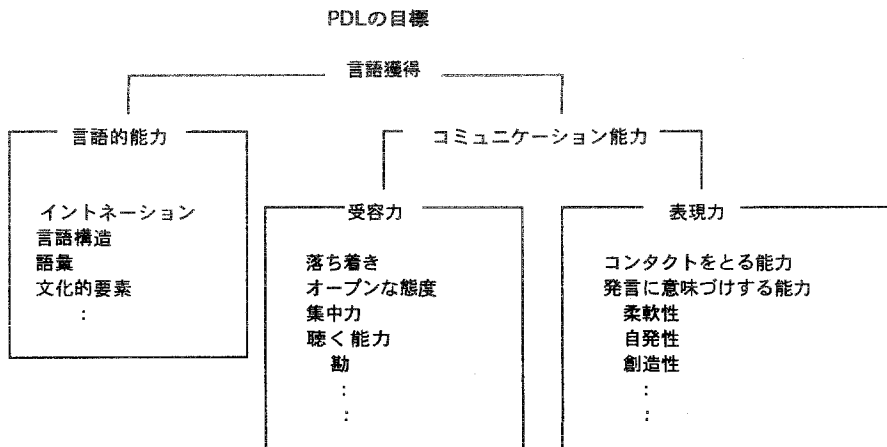
各言語活動に先立って、その準備段階をなすウォームアップが行われる。

ix) 練習形態

「ダブル」、「ミラー」、役割交代、ロールプレーなどの練習形態およびその技術が直接的、間接的に採り入れられている。

III. PDLの目標

PDLの目指すところは、言語獲得およびコミュニケーション一般に必要なとされる能力を活性化し、育成することにある。



言語構造や語彙の習得は学習目標ではなく、言語は学習過程を形成する諸活動におけるコミュニケーションの手段である。コミュニケーションを促進するような活動を行っていく過程でその言語を体験し、言語的間違いも含めて参加者同士お互いを受け入れていく雰囲気の中で結果的に言語習得も促進される。

IV. 言語へのアプローチ

PDLは通常インテンシブコースの形で行われる。最初の段階で、どのように言語へのアプローチがなされるかを具体的に見ていきたい。

i) PDLの紹介

コースの初めに、メタファーを使ってPDLが紹介される。ここではPDLにおいては一人一人マイペースで学んでいくこと、一番最初に言語を形づくるリズムとメロディーに触れていくこと、そして粘土でいろいろな形を作るように言葉を使っているいろいろ試していくことなどが述べられる。コースを始めるにあたって参加者がこの新しい教授法に対して前向きな態度で臨めるような紹介の仕方が工夫される。

ii) 言語のリズムとメロディーへの第一歩

★リラックス (Entspannung)

各セッションはリラックスによって始められる。この時、参加者は床のカーペットに横になり、目を閉じて活性者（教師）の声を、学習言語 - 母語 - 学習言語の「サンドイッチ」で聞きながら、体の各部位に意識をあてていく（コース中のいろいろな手順の説明は「サンドイッチ」あるいは母語 - 学習言語の「オープンサンド」でされる）。この、瞑想にも似たリラックスの場を持つことによって、参加者は日常の雑事から自分の意識を解放し、より集中してコースに臨むことができる。また、このような形で、ソフトな、こころよい体験として、学習言語との初めての接触がなされる。

★ウォームアップ：グループミラー (Gruppenspiegel)

一番目の練習形態である「ダブル」のウォームアップは「グループミラー」と呼ばれる。活性者（教師）はここで、運動選手と同じように発声器官の筋肉をならす旨を説明する。参加者全員で輪になり、活性者の動作と発声をまねする。活性者は輪の中に想像上の何か（一輪の花、一羽の鳥など）を見立て、それに向かって二、三分話しかける。参加者は、間投詞なども含むその発話から学習言語の韻律的特徴を感じとる。

★ダブル (Doppeln)

粘土細工を作る前に粘土をこねるのと同様、新しい言語で文を作る前に、その素材である音やリズムと親しむ段階である。ウォームアップがグループで行われのに対し、「ダブル」では参加者が一人ずつ車座に座っているグループの中心に出てきて行う。次に続く「ミラー」「三者対面」も同様である。また、PDLでは基本的に床またはじゅうたんに座った状態でコースが進められる。

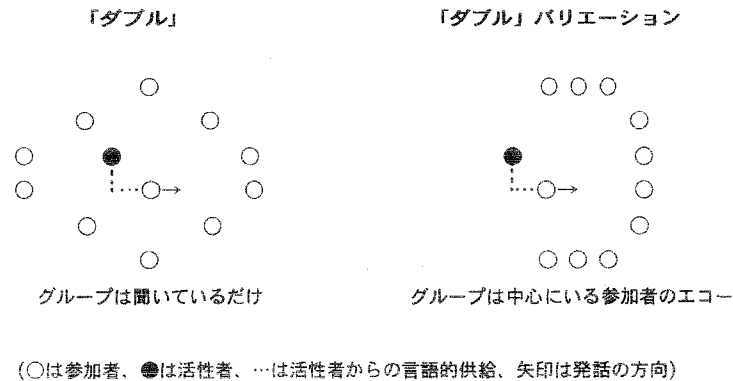
サイコドラマでは、参加者が何かを表現するのが困難な際、他の誰かが当人と同じ体の姿勢をとって傍らに立ち、当人に代わってその言わんとするところを表現するべく試みる。PDLでは、活性者が参加者と同じ姿勢をとって斜め後ろに座り、呼吸のリズムもできるだけ合わせ、参加者の身になって二分程度のモノローグを発話する。

まず、参加者は顔全体を覆う仮面をつけて視界を遮られ、活性者の声だけに意識を集中して聴く。次に、顔の上半分だけを覆う半仮面をつけ、耳に入ってくる音声をまねする。

活性者は基本的に初めの発話を繰り返すが、参加者がまねする仕方によって微調整していく。三度目は、参加者は目の部分がくり抜かれた半仮面をつけ、二度目と同様にする。

理想的なのは、参加者がまさに言いたいと思っていたことを活性者が表現できる場合であるが、必ずしもそうはいかない。しかし、大切なのは活性者が参加者個人にヒントを合わせて、言わばレディーメードでなくオーダーメードの発話をするという点にある。

全員「ダブル」を経験した後、半仮面で参加者が活性者のまねをしたのを、グループがまたまねする、というエコー(発話をこだまのように繰り返すこと)を伴う形のバリエーションを数回やる。また、「ダブル」を一人ずつやっていく合間に、いろいろな形の練習をグループで行う。いずれも言語のリズムとメロディーに主眼をおいたもので、体の動きを伴った詩の朗唱などがある。



iii) 言語的な自立への第一歩

★ウォームアップ：鏡の中の手 (Handespiegel)

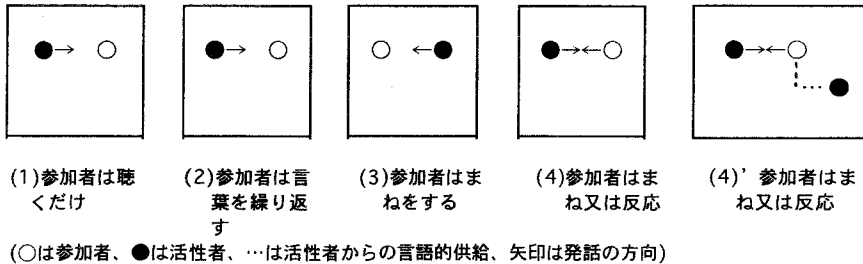
二番目の練習形態「ミラー」に先立って「鏡の中の手」が行われる。参加者は二人組になって向き合い、一方がする手の動きをもう一方が鏡のように左右対称にまねする。これは、相手の動きに合わせる、という、聞き手として大切な能力のトレーニングになる。

★ミラー (Spiegel)

「ダブル」では参加者の言葉を代弁しようと努めた活性者が、「ミラー」では自分の心に浮かぶことを言葉にしていく。その際、集中しやすいように、目の見えない、顔の上半分を覆う半仮面をつける。活性者と向き合って座る参加者は、音声に集中できるよう、やはり活性者と同じ仮面をつけてその発話を聴き(下図(1))、次に繰り返す(下図(2))。次の段階で参加者は活性者の鏡となるため、場所交換をして活性者の場所に座り、目のあいた仮面をつけて、表情やジェスチャーも含めて活性者のまねをする(下図(3))。活性者はもう仮面をつけていない。最後に、それぞれ元の場所に戻り、参加者は活性者の発話をまねするだけでなく反応したければ反応する(下図(4))。仮面はつけていない。場合によって、もう一人の活性者(PDLでは、通常二人の活性者が一つのグループを担当)が参加者の後ろについて援助をする(下図(4'))。初心者の場合、この段階では、まだ本格的な会話へとつ

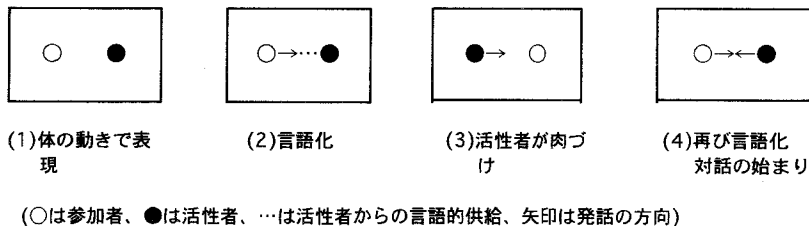
なげていくところまでいかないが、「ダブル」におけるモノログとは明らかに異なり、二つの主体が存在する場面が最終的に構成される。

「ミラー」



参加者が全員「ミラー」を終えた後、次に行われる「三者対面」への橋渡しともなる「ミラー」のバリエーションを数回やる。ここでは「ミラー」で活性者がやったことを参加者が試みる。但し、参加者は、まず心に浮かぶことを言葉にする前に体の動きで表現してみるところから始める(下図(1))。その際、目を覆う半仮面をつけている。そうして体の動きで表した内容を、できる範囲で言語化しようとする。その時、向き合って座る活性者の援助を受ける(下図(2))。次に、場所を交換して、参加者の位置に活性者が座り、参加者の表現しようとした内容を言語的に肉づけする。繰り返しや言い換えを多く含むその発話を、目のあいた仮面をつけた参加者がエコーのように繰り返す(下図(3))。最後に、仮面を取ってそれぞれ元の場所に戻り、参加者はできる範囲で自分の表現しようとしたことを再び発話し、活性者は会話の形で援助をする(下図(4))。内容的には同じでもモノログから対話へと発展するわけである。また、この段階以降は常に参加者自身が主体となって発話を作っていく、活性者はその言語的材料を提供する。

「ミラー」バリエーション



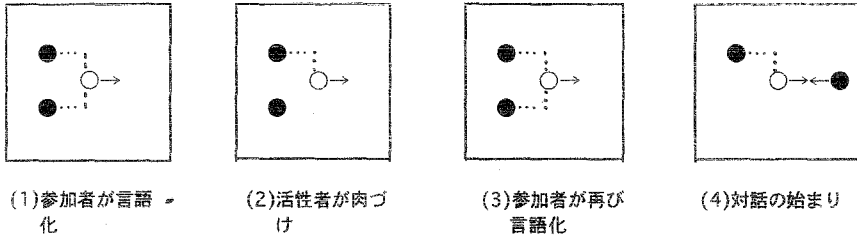
iv) その後のステップ

★三者対面 (Triadische Begegnung)

参加者は半仮面をつけて心に浮かぶことを学習言語で表現しようとする。斜め後ろに左

右一人ずつ活性者が座り、言語的に援助する(下図(1))。次の段階では、左後ろの活性者が言語的に肉づけした形で参加者の発話をあらたに展開し、参加者は繰り返す(下図(2))。最後に、参加者は目のあいた仮面をつけ、再び自分の発話を展開する。活性者二人が言語的に援助する(下図(3))が、途中で右後ろの活性者が参加者の前へと身を乗り出し、コメントを挟んだりして会話へと導く(下図(4))。

「三者対面」



(○は参加者、●は活性者、…は活性者からの言語的供給、矢印は発話の方向)

★「引き延ばされた出会い」(Verzögerte Begegnung)

グループが二つに分かれ、各グループのうち一人の参加者が活性者の援助を受けて心に浮かぶことを言語化してみる。それぞれ活性者の肉づけを受けた後、その二人の参加者が向き合って会話を試みる。

以下、その都度直接参加する参加者が増えるような練習形態をとっていく。

V. 言語獲得のプロセス

伝統的な外国語教育においては、発話内容はたいてい教師または教科書によって決められるが、PDLでは参加者の発話欲求から出発する分、口にする言葉は「自分の言葉」であり、違和感が少ない。発話は「今、ここで」グループあるいは参加者が伝えたいと思うことや心に浮かぶ事柄を表現するので、リアルである。活性者(教師)は参加者の発話意図を汲み取って、不足している言語材料を補給する。発話欲求を満たす、そのような言語項目は、記憶に留まりやすい。

「ダブル」や「ミラー」など主となる練習形態では、一つのまとまった内容の文章が少なくとも三回繰り返される。しかも、その文章は、どんどん内容が展開していく一本の線ではなく、部分的な繰り返しや同義語を用いて少しずつ重なりながら新しい内容も盛り込んでいく形をとっている。

例：声が聞こえる。言葉が聞こえてくる。日本語の言葉が聞こえてくる。日本語。新しい言葉。新しい響き。新しいリズム。新しいメロディー。新しいメロディーを聞いている。新

しい言葉を聞いている。日本語を聞いている。...

このような螺旋状の展開と軽いバリエーションをつけた繰り返しによって、やはり言葉が記憶に残りやすくなる。

コースの性質上、集中して学習言語と接することになるため、言語の構造的規則性は、かなりの程度まで無意識裡に獲得され得る。参加者が言語的に間違った表現を使った場合には活性者が正しい表現に直して繰り返すが、それを使うよう強制したりはしない。全コースを通して言語的正確さよりも表現欲求の伝達が優先される。参加者が、ある言語的規則を認知的に把握したいと臨む場合には、出てきた誤用を基にグループで規則を発見する形をとる。文法はインプットとして与えられるのではなく、言語使用の結果アウトプットとして出てくるわけである。

VI. PDLを日本語教育に応用するにあたって

これまで専らインド・ヨーロッパ言語に属する言語の母語話者間で行われてきたPDL(例外としてトルコ語がある)を別系統の言語である日本語に効果的に応用するには、更なる工夫が必要であると思われる。語彙も文構造も似ている言語間では、類推によって意味の上でも文法についてもかなりのことが把握され得るが、日本語ではそうはいかない。たとえ、その場の状況から大意がつかめたとしても、ある程度分節できなければ応用はきかない。そこで、例えばラックスや手順の説明における、学習言語 - 母語 - 学習言語、または、母語 - 学習言語の「サンドイッチ」の部分や、訳を与えて朗唱する詩などで、より意識的に日本語の構造をつかみやすく提示する必要があると思われる。デュフェーは、「ダブル」や「ミラー」などの一つのセッションが終わる度に、参加者に耳に残った単語の意味を聞く機会を与えてもいいかもしれない、とも言っている。

文字についても考えなければならない。一番初めの段階ではリズムとメロディーに主眼をおき、書かれたものを与えることはないが、それでも、例えばフランス語のコースで通常三日目あたりに配付される、それまでに朗唱された詩のハンドアウトにしても、日本語の場合、普通の漢字かな混じり文では初心者には読めない。ヨーロッパ人が読めるためにはローマ字をふらなければならないだろう。その際、ローマ字を読んしまうことによる発音への干渉にも気をつけなければならない。

VII. 今後の課題

PDLでの筆者の限られた体験からは、まだこの教授法に関して何の結論を引き出すこともできない段階である。PDLにおける「今、ここで」何が言いたいのか、何がしたいのか、という問いかけは筆者にとって新鮮に感じられた。また、抽象的な表現で表されてしまうが、受容力また表現力を含む、PDLが目指すところのコミュニケーション能力の育成が、実際にある程度トレーニングできる、という印象を受けている。

一方、ある外国語が使えるようになるには、ある程度整理され、限定された情報を中心に積み上げていくのが着実なのではないかという気もしている。無意識の内に獲得できるという夢も見ていたが、大人になってからは、それなりに意識的な学習プロセスと、少なくとも組み合わせることなしには、言葉の海の中を手探りする期間が不要に長くなってしまわないかと

危惧する。

今後PDLを純粋な形で実施する中で工夫できる点はどんどん改良していくと同時に、従来の教室活動においてもPDLを部分的に採り入れて試す機会を見つけていきたいと考えている。

参考文献

- Dufeu, Bernard (1992) Sur les Chemins d'une Pedagogie de l'Etre. Mainz: Editions Psychodramaturgie.
- (1993) "Die Sprachpsychodramaturgie: ein Beitrag zur Psychodramapadagogik."
in R. Bosselmann, E. Luffe-Leonhardt und M. Gellert 編 Variationen des Psychodramas. Meezen: Verlag Christa Linner.
- (1994) Teaching Myself. Oxford: Oxford University Press.
- (1995) Wege zu einer Padagogik des Seins. Mainz: Editions Psychodramaturgie.
- Marineau, Rene F.(1989) Jacob Levy Moreno 1889-1974. London: Routledge.
- (1989) 増野肇、増野信子訳(1995)『神を演じつづけた男』白揚社。
- 沢田麻理(1994)「心理劇を応用した言語教育 —Psychodramaturgie—」『第7回日本語教育連絡会議報告発表論文集』第7回日本語教育連絡会議事務局。